ポーランド人音楽家 JAN KOWALSKI の シベリア孤児救援マンドリン演奏会

引田 秋生

2020 年 7 月 22 日はシベリアから救出されたポーランド孤児の最初の来日から 100 年目でした。日本赤十字社と福田会育児院などによるこの救済活動には全国から多くの支援が寄せられました。以下はその一コマ、あるポーランド人音楽家が日本各地で行った「義捐演奏会」の調査記録です。（編集部）

１．調査のきっかけと経過

ある日、「ロシアの盲目の詩人」と呼ばれたワシリー・エロシェンコに共通の関心を持つ友人が「さっぽろ文庫」にあるエロシェンコ関する以下の記述は間違いではないかと問い合わせてきた。

「大正十一年暮れのある日。この日は朝から猛吹雪で、全市停電。豊平館を訪れる人もなく、ひっそり雪に埋もれていた。突然、どやどやと雪まみれの一団が扉を開けて入って来た。見ると土田明広はじめチルコロ・マンドリニスコ・アウロラ楽団の連中である。その中に、見知らぬ外人がひとり混じっていた。これが、バラライカの名手ワシリー・エロシェンコだった。エロシェンコが、自作の一曲を楽団に献呈したので、彼の歓迎会を兼ねて小演奏会を開きたいのだという。私は早速準備にかかった。」（杉山正次「豊平館とともに六十年」〈さっぽろ文庫 15〉『豊平館・清華亭』札幌市 1980、p.116）

エロシェンコはこの前年、日本を追放され中国に移っており、確かに別人と混同していると思われる。

これについて前川公美夫氏は杉山氏の回想に基づいた自分の誤り（〈さっぽろ文庫 57〉『札幌と音楽』北海道新聞社 1991、p.161）を訂正し、それはこのころ北海道に来て「北大生と親交があったように見受けられる」コバリスキーではないかと推測している（『北海道音楽史』私家版 1992、大空社 1995、p.192）。

この人物については、渋谷忠三氏が道内最古のマンドリン合奏団「北大アウロラ」との関連で「大正十年流浪の楽人、イアン・コバリスキーのヴァイオリンやマンドリンの演奏に刺激され、当時医学生の小河原四郎を中心に「アウロラ・マンドリニ・オルケストラ」を結成したのが事の始まりである。」（『札幌と音楽』p.128）と書き、前川氏も巻末の年表に「大正 10 年…コバリスキー演奏会。ヴァイオリンとマンドリン独奏」（同書 p.318）と記している。

以上から私も、大正 11 年暮れに豊平館を訪れたのはコバリスキーかと考えたが、今回調査した朝日新聞の記事によれば、当時同紙の記者であった土岐善麿らが同年春に故国ポーランドへ帰るコバリスキーを見送っており、この可能性も否定された。

さらに、杉山氏の「自作…を［アウロラ］楽団に献呈した」という回想について北大に現存するマンドリンオーケストラ「アウロラ」に問い合わせたところ、残されている当時の新聞記事や回想からこの人物はロシアの亡命音楽家アレキサンダー・ドブロホトフと判明した。

これで杉山氏の勘違いは解決したが、それではこのコバリスキーなる人物は何者だろうか、ということが私の関心事となった。

山形県酒田市における義捐演奏会（1922.1.10、酒田高等女学校）のチラシには「補助 ポーランド公使館」とあり、ポーランド大使館や、北海道ポーランド文化協会にも問い合わせたが詳細は不明だった。

その後、同協会の紹介で埼玉大学名誉教授澤田和彦氏から重要な資料―外事警察の資料と朝日新聞に四回にわたり掲載された「土岐生」の記事「漂泊の楽人を送る」―が寄せられ、この資料からイアン・コバリスキーがポーランド人（当時 37 歳）で、日本各地でシベリア孤児救援の慈善演奏会を開いたことがわかり、ポーランド語では Jan Kowalski と綴ることも教えていただいた。

朝日新聞の他に当時の演奏会の様子を伝える新聞記事を探したところ、東京紙（朝日、読売、萬朝報）以外にも地方紙（函館、小樽、北海タイムス）で詳しく報道されており、一定の人物像が浮かんできた。

２．Jan Kowalski 来日の経緯

「漂泊の楽人を送る」（二）によれば「欧州戦争では陸軍中尉として活躍、左手に貫通傷を負って赤十字病院に収容されているとき、ロシア革命にあい、シベリヤの姉を訪ねて故国を離れた。ハルピンやウラジホをマンドリンを抱えて彷徨い、流れ流れて青島に来たとき、演奏会で貿易商と知り合いになり、二千円の「見せ金」を借りて日本に上陸したが、上陸時には懐に二銭しか残っていなかった。」（朝日新聞 1922.5.30）

=写真 コバルスキー氏= 朝日新聞 1922.1.20 より

３．マンドリン奏者、作曲家として高い評価

新聞記事では「マンドリン大家」「マンドリン名手」という見出しが多い。1906 年世界マンドリン大会でイタリア人大家を破り優勝、イタリアのプッチーニと並び称される作曲家などの記述もある。ドイツの蓄音機会社からマンドリン独奏のレコードが出ているとも報じられている（萬朝報 1921.10.17）。

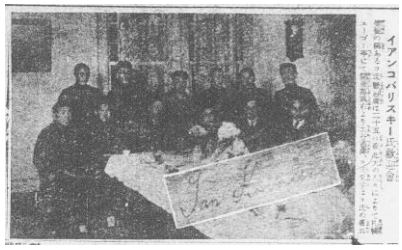
東京での演奏会の入場料を比較して、独奏としては他の有名音楽家に劣らない金額だとも評価されている。東京の演奏会では、イワノフ作曲の「ドムカ・シベリイ」のマンドリン独奏が五回のアンコールがあったり、演奏会の締めは自身作曲の「ポーランドマーチ」の独奏をしている（函館新聞 1921.11.24）。

４．日本各地で演奏会（1921~22）

「マンドリン名手コバリスキー氏来京　10 月 26 日、27 日に帝国大学（東大）基督教青年会館にて演奏会　ポーランド公使館補助の下　母国のシベリア孤児救済のため。」（読売新聞 1921.10.17）

「東京第一回演奏会の後は、東北大学（仙台）、盛岡、千葉、慶応大学（東京）、秋田、弘前を経て、函館では 26 日、札幌 27 日、小樽 28 日、その後は、新潟、長野両県で演奏し、関西方面に向かう予定。」（函館新聞 1921.11.22）

「マンドリンの世界的名手イアン、コバリスキイ氏の音楽大演奏会は来る 27 日正午 12 時から当区美萬寿館に於て開催さるるが氏のマンドリンは全く天才的で到底尋常人には学び得ぬ二重三重乃至四重音を聴取し得る奇跡的技量を有し居り〈中略〉因に当日午後6時から氏の講演会及び歓迎会を豊平館に開く由」（北海タイムス 1921.11.27）



=写真 北大の人々によるコバリスキー氏歓迎会(11.25)
文字はコ氏の署名= 北海タイムス 1921.11.30 より

５．生い立ちは謎

報道されている演奏技術や作曲能力から、ポーランド国内でそれなりの音楽専門学校で学んだか音楽家に師事したと推測され、陸軍中尉という階級も一定の学歴を思わせるが、これらについては新聞記事にも、ポーランド国内からも情報はない。記事からエスペラントの会話もある程度出来たことが窺えるが、どこでどのように学んだかは不明。

*　　*　　*

以上はあくまでも当時日本国内で報道された情報で、その内容はポーランド国内では裏付け資料は得られていない。ロシア革命の混乱の影響や、Jan Kowalski がポーランド人にはあまりにもありふれた名前で偽名の可能性も否定できないことなどが調査のネックになっている。

何とかして海外の情報を得るため、ドイツでレコードを出したという記事を手がかりに、ドイツ語翻訳者を介してドイツ国立図書館やグラモフォンなどに照会し、関係資料の調査を続けていきたい。

（ひきた・あきお、山梨エスペラント会会員、筑波大学附属視覚特別支援学校元校長）

ポズナン市エスコラピオス会聖ヨゼフ・カラサンス高等学校 第２回「HAIKU―日本の詩形」コンクール(2021)入賞句

選評（コンクール組織委員会 津田晃岐，日本語訳）

昨年同様、パンデミアの中、メールやチャットなど遠隔教育ツールを利用したコンクールとなった。期間は2月 18 日～3月 15 日、冬または春に材を取ったポーランド語の五七五を募集した。応募数は 18 句。季題は時候から生活、動植物まで実に様々（暖炉、毛布、節分草、鈴蘭、帰雁、兎など）。句の内容も、風景への感動や、自身の感覚（視覚、聴覚、触覚など）に注目したもの、呼び覚まされた記憶の告白など、非常に豊かだった。

その中で入賞句は静かな眼差し、新鮮な発見、ありありと浮かぶ描写、そして何よりポーランド語らしい「切れ」の鮮やかさで特に目を引いた3句である（その鮮やかさを日本語に移すのに、訳者は苦労することになった）。

（つだ・てるみち、聖ヨゼフ・カラサンス高校日本語教員）

samotna chatka	小屋独り
skryta pod płaszczem śniegu	雪かぶり―そこ
chcę się tam ukryć	隠れたい

Dominika Jopek, 2A po g
ドミニカ・ヨペク、２年 A 組（三年制）

pszczoły wróciły	蜜蜂の
jak boleśnie żądliły	戻れば痛き
nikt nie pamięta	針忘る

Franciszek Wytykowski, 2A po g
フランチシェク・ヴィティコフスキ、２年 A 組(三年制)

na szybie mróz	窓ガラスに
misterne wiersze pisze	寒気 詩を描(か)く―
ja je przepiszę	書き写そう

Marianna Minksztym, 2D po g
マリアンナ・ミンクシュティム、２年 D 組(三年制)